総 合 学 習

橋本　俊彦　山岸　朋子　橋田真由美
松井　由紀　金岡　弘宣　八崎　和美
上田　雅人　今井　直人

1　総合学習における知識創造とは

これまでの総合学習のあゆみ

本校が総合的な学習に取り組み始めたのは平成７年度であり、翌８年度からは「総合学習」と称して実践と研究を重ねてきた。教科の枠を越え、今日的課題性のあるテーマを設定し、「体験活動を通すことで、社会の変化に対応できる力や態度を育成すること」ととらえた。さらに平成１４年度より、めざす子どもの姿を「共に生きる社会や環境に自らかかわり、よりよい生き方を求めようとする姿」と設定し、今日的課題にかかわる視点で事象を捉え、その視点にかかわっての価値観の形成を目指していくことにした。その過程の中で問題解決に必要な学び方やものの考え方を獲得していくことを大切にしてきた。

めざす子どもの姿

主体的・協同的

加えて、子ども同士がかかわりあいながら学んでいく形態を重んじてきた。それは、次の理由によるものである。近年、環境問題の悪化、情報化社会の進展など様々な課題が産出してきている。このような時代を生き抜く子どもには、「生涯にわたって学び続けようとする力」と同時に「主体的協同的に様々な問題に立ち向かい、その解決を図る力」を育てていくべきであるからである。今後直面するであろう課題の解決には個人では限界がある。他者との上手な相互交渉のしかたというのは生まれつき身に付いているわけではなく、仲間と力を合わせて、情報を集め協力し合って活動するという社会的技能は、教えられなくてはならない。そのための有効な機会が「協同」という学習状況であるからだ。

さらに、学習指導要領の改訂の方向性も視野に入れ、総合学習のあり方を考えてみる。

改訂学習指導要領

改訂学習指導要領では、次のような「学力に関する考え方」を提案している。「基礎的・基本的な知識・技能の育成（習得型の学力）と、自ら学び自ら考える力の育成（探求型の学力）とは、対立的あるいは二者択一的にとらえるべきものではなく、この両方を総合的に育成することが必要である。そのためには、「習得」と「探求」との間に、知識・技能を「活用する」という過程を位置づけ重視していくことが大切であると述べられている。これは、各教科で学んだこと（「習得」）が総合学習（「探求」）で生かされていない現状を踏まえて改訂されたものである。「習得」「活用」「探求」は三つ並列しているのではなく、能力育成の一連の学習プロセスとしてとらえたい。基礎的・基本的な知識・技能の定着やこれらを活用する学習活動は、教科で行うことを前提に、総合学習では、体験的な学習に配慮しつつ、探求的な学習となるようにしたい。つまり、総合学習の時間と各教科等との役割分担を明らかにし、より探求的な学習を充実させることをねらいとする。

以上のことをふまえ、本校の総合学習のポイントを以下の４点とする。

総合学習のポイント

① 総合学習のねらいを明確にし、子どもに身に付けたい力(学び方やものの考え方)の視点を明らかにする。

学び方やものの考え方

- 身近な「ひと・もの・こと」にかかわろうとする意欲を持つ。
- 問題を見い出す。
- 問題を整理し、その関係性・重要性を推し量り、取り組むべき課題を決定し、具体的な探究計画を立てる。
- 実験や観察、インタビューやアンケート調査、図書資料やインターネットの検索などの多様な方法を用いて発信・表現する。
- 取り組んでいる内容や方法、進行状況についての評価・改善を行い、次の学習の見通しを立てる。
- 一連の学習の成果を整理し、相手の立場や理解の程度を考慮し、適切な方法を用いて発信・表現する。
- 学習活動全体を多面的にふり返り、課題の取り組み方、発信・表現の方法等について評価するとともに、取り組んだ課題について自分の考えがどう変容してきたのか、その課題について今後どのようにかかわり、取り組んでいくのかを考える。

② 教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探求的な活動を行う。

③ どのような力が身についたかを適切に評価する。

④ 他者と共同して課題を解決しようとする学習活動を重視する。

以上のことをふまえ、総合学習での知識創造を以下のように定義する

総合学習における知識創造

自ら課題を見つけ 自ら学び　自ら考え　主体的に判断し　一人一人が知を出し合い　協同的に　課題を解決していく営み

２　総合学習における「プロセスの自覚」を促す・活かす手だて

(1) 総合学習における「よさ」

一連の知的営み
他者との交換

総合学習の「よさ」とは、前述したように、物事の本質を探って見極めようとする一連の知的営みのことであり、それを他者と交換し合い、自らの考えや意見を更新したり、共同して実践に移したりしていくことである。こうした知的な営みが有機的につながって発展的に繰り返されていくことが望まれる。この過程で、学び方やものの見方・考え方を身につけていくのである。

(2) 「よさ」の共有のための手だて

① 可視化

ゴールを意識し
タイムスケジュールを立てる

ア　活動の見通しを共有する

グループの一人一人が活動のゴールを意識し、ゴールへ至るまでの活動を想定し、グループ員で共有する。何を、いつまでにどのような形で仕上げれば良いのかを共通理解し、ワークシートや掲示等でいつでも見えるようにすることで、今の自分が行うべきこと、足りないこと、を自覚しながら活動することができる。

活動の評価基準を作る

（ルーブリック）
学習活動やその成果を評価するための規準
コミュニケーションの仕方やグループワークの進め方など、単純に数値化できない事柄について評価を行うための視点と規準

イ　活動の評価規準を明確にする

子どもの主体的な学習も、教師のねらいのもとに行われることを押さえたい。何を学習すべきかの「枠」を示すことができるのは、教師であり、枠も示さずに子どもに学習をまかせても、その学習は拡散し、子どもにとっても手応えのない学習経験となる。そこで、教師は指導に際して子どもに何をさせたいのか、どんな枠を与えるのか、自分の「指導目標」を明確化する必要がある。しかし、それは教師の目標であって、子どもの目標ではない。子どもが教師の指導目標を理解し、学習活動を効果的に行う様になるには、教師の次の準備が必要である。

- 教材を分析して「指導目標」をはっきりさせる。→基ルーブリック
- 指導目標を子どもにとっての「学習目標」に翻案する。→単元ルーブリック
- 学習目標をさらにわかりやすい「学習問題」に翻案して子どもに与える（後には子どもと考える）。→実践ルーブリック

以上のような手順でルーブリック評価を取り入れて、子どもが自分の学び方やものの見方・考え方のレベルを知り、高めていくための指標としたい。

② 「かかわり」

自ら判断・評価
・自分で考え、自分で計画を立て、自分で評価ができること
・さらにその活動が価値あるものかを見抜く目を持つこと

総合学習では、学習活動の自由度が高いことから、子ども自身が自ら判断・評価しながら行動することが要求される。その場を「かかわり」が担う。自分が調べたことや考えたことを発信することで、自分自身の学習成果に対する学習者自らの評価活動が行われることになる。この時に他の子どもから与えられるフィードバックは、子どもの学び方やものの見方・考え方を高めるための大切な情報になるだろう。

③ 実践的自覚のデザイン

年間を見通した
カリキュラムの構築

総合学習においては、学び方やものの見方・考え方を身に付けることを目指している。学び方やものの見方・考え方を身に付けるとは、探求的な学習の過程において、それらを現実の様々な状況に応じて活用し、確かにすることである。さらに、各教科等で身に付けた、比較する、関連づけるなどのものの見方・考え方を、学習活動において総合的に活用できることも期待される。総合学習では、各教科等を横断して総合的に知識・技能を活用しながら、子どもは学習活動を進める。そこでは、各教科等で学んだことの有用性を実感し、学び方やものの見方・考え方を確かにしていくことが期待される。こうして、子どもは、自ら学び、自ら考える力を高めていく。そのために、教師は教科・総合学習の連係を図り、「習得」「活用」「探求」の学習をいきつもどりつするようなカリキュラムを、年間を見通して構築することが必要である。